

赤谷森林ふれあい推進センター  
自然再生指導官 藤木 久司  
株式会社群馬野生動物事務所  
代表取締役 春山 明子

## 1 課題を取り上げた背景

ニホンジカは近年、全国でその被害が深刻化しており、植生の変化やさらに被害が進んだ場合には裸地化し土砂流出に至るなど、我が国の国土保全にとって、その対策が大きな課題となっています。

赤谷プロジェクトが目標として掲げる「生物多様性の復元」と「持続的な地域づくり」を達成するためには、ニホンジカの摂食被害によって将来的に懸念される森林生態系や生物多様性への悪影響を回避することが必要と考えられます。

一方、ニホンジカは個体数が急激に増加する特性から摂食被害の速度が急激に高まってしまうため、被害を認識してから対策を検討するのでは実行までに時間がかかってしまい、多くの事例では手遅れとなっています。

また、一度深刻なダメージを受けた植生の回復事業は非常に困難であり、現存植生を回復できないことも多くあります。そこで赤谷プロジェクトでは、新たなニホンジカの被害抑制対策として、進入初期段階からその影響を適時にかつ適切に把握し、状況に合わせた総合的な対策を実施する手法を検討することにしました。



(三国山山頂 積雪 30cm)

## 2 具体的な取組

平成25年度にほ乳類ワーキンググループのもとにニホンジカ検討チーム会議を設置し、ニホンジカの摂食による被害と赤谷の森に設置したセンサーカメラの撮影結果について調査・分析と評価をおこないました。

①ニホンジカの摂食による被害：赤谷の森51地点他を調査

②ニホンジカの分布とその経年変化：哺乳類の分布とその経年変化の把握を目的として、平成20年から実施している赤谷の森51地点に設置したセンサーカメラによるモニタリングの結果から、ニホンジカの分布の動向を分析

## 3 取組の結果

ニホンジカの摂食被害について分析・評価したところ、

- 一部の湿地や伐採跡地では下層植生の過度な摂食圧が確認されたものの、樹木に対する剥皮などは限定的
- 摂食の影響を受けやすい北部の山頂部の高山草原や低木林においては、顕著な影響は見られない

ということがわかり、ニホンジカの餌となる植物の摂食状況から、現在、「赤谷の森」におけるニホンジカの密度は低く、進入のごく初期段階と考えられます。

一方、センサーカメラによる5年間の撮影結果を分析・評価したところ、

- ニホンジカの出現地点数は5倍、出現頻度は2~5倍に拡大している

ということがわかり、このことからニホンジカ個体群の動向はエリア内及びその周辺部において、分布を拡大しながら増加している可能性があることがわかりました。

これらの現状評価を踏まえ、ニホンジカ検討チーム会議では、将来にわたって赤谷の森の生物多様性を健全な状態で保全するために必要と考えられる「赤谷プロジェクト・エリア内のニホンジカ個体群を『低密度で維持』すること」を掲げた管理目標をまとめました。



(センサーカメラ設置箇所：51地点)

## 4 まとめ

野生鳥獣の被害は被害の範囲や態様が広いため、関係者が連携して取り組むことが必要です。このため平成26年度からは地方自治体、猟友会、地域の方々等との情報の共有・交換を進めながら、どのような状況になったらどのように行動するのかといった判断や対応の準備を進めています。

今後は、全国への分布が急速に進んでいるニホンジカ被害の「未然防止型対策」のケーススタディとして活用できるよう、森林生態系や農林業被害の未然防止に向けた、ニホンジカを低密度で維持する体制の構築、モニタリング及び密度管理手法の検討と実践に取り組み、他地域で活用できるよう情報を発信していきます。